

興福寺中室・経蔵・鐘樓の調査(平城第559次)

興福寺では現在、「興福寺境内整備基本構想」(1998年)にもとづき、寺観の復元・整備が進められています。これにともない奈良文化財研究所では、中金堂院や南大門、北円堂院、西室等の発掘調査を継続しておこなってきました。今回の調査は、中室・経蔵・鐘樓を対象とするもので、調査期間は2015年10月2日から2016年1月15日まで、調査面積は計835.5㎡です。

中室は、中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む僧房(僧侶が生活する建物)のうち、東僧房の呼称です。西僧房は西室、北僧房は北室と呼ばれていました。経蔵(お経を収蔵する建物)は中金堂の北東に、鐘樓(鐘つき堂)は中金堂の北西に建てられていました。

中室・経蔵・鐘樓の建立年代は、中金堂やその周辺の建物と同じく、奈良時代初頭と考えられます。いずれも、建立以後8度ほど火災に遭い、享保2年(1717)に焼失してからは、再建されることなく現在に至っています。調査前、経蔵と鐘樓は基壇状の高まりを残しており、地表に礎石の上面が見えていました。また、中室の北半でも同様の状態の礎石が確認できました。

調査の結果、中室・経蔵・鐘樓の礎石やその据付穴・抜取穴、基壇外装等を検出しました。特に中室では、創建期のものとみられる凝灰岩製の基壇外装

が、非常に良好な状態で残っていました。

残存する礎石は、一部動かされているものもありましたが、多くは創建当初の位置を保っており、再建の際にはその位置や規模を踏襲していることがわかりました。建物の規模は、中室が東西約12.4m、南北約62.8m、経蔵が東西約6.5m、南北約10.1mです。鐘樓は部分的な調査のためはつきりしませんが、経蔵と同規模だったとみられます。また中室は、西室とほぼ同規模であるものの、柱の配置が異なり、一部屋の大きさが違っていたと考えられます。

建物の周辺の様相についても、新たな知見が得られました。経蔵・鐘樓の北では、東西方向に延びる幅約50cmの石組溝と幅1.3m以上の玉石敷が、経蔵の西では、南北方向に延びる幅約2mの玉石敷が見つかりました。石組溝は、講堂周辺の排水のための溝、玉石敷は、建物どうしを結ぶ通路の可能性があります。

今回の調査では、興福寺創建期の伽藍中枢部の実態に迫る、貴重な成果を得ることができました。いっぽうで、新たな疑問も浮かびました。東西対称の位置にある僧房は、柱の配置まで含めて対称であるのが一般的です。なぜ、興福寺の中室と西室は、柱の配置が異なっているのでしょうか?その背景については、今後、文献史料等とも照らし合わせながら追究していきたいと思います。

(都城発掘調査部 桑田 訓也)



経蔵(手前)・中室南端(奥)調査区全景(北西から)



中室北面の創建期基壇外装(西から)